

機関番号：17501

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520550

研究課題名 (和文) 人工的日英バイリンガル養育児における英語習得の縦断的研究

研究課題名 (英文) Developmental Study of English Acquired by Japanese-English Bilingual Children Raised in an Artificial Bilingual Environment

研究代表者

御手洗 靖 (MITARAI YASUSHI)

大分大学・教育福祉科学部・准教授

研究者番号：80229731

研究成果の概要 (和文)：

人工的日英バイリンガル養育をされた二人の幼児の発話を資料として、動詞の用法の発達および日英語の使い分け能力の発達を分析した。動詞の用法の発達は、使用例と場面との結びついた親のインプットの (不完全な) 再生から始まり、続いて未分析なチャンクの利用と語の入れ替え、さらに軸語スキーマにおける、主語、目的語、補語といった枠(slot)内の要素を入れ替えて創造的な発話へと進んだ。意味的な過拡張の誤用が見られたが、基本的な語順の誤りは少なかった。これは、4歳までの発話は完全な創造性が少ないことによるものと考えられる。第二に、二児の日英語の使い分け能力の発達を分析した。2歳以降に使い分けを始め、2歳6ヶ月までには多くおこなうようになった。使い分け行動の前に同等表現の使用が数ヶ月続き、同等表現の使用は使い分け開始後も続いた。使用言語の誤りを自己修正する行動は、使い分けが始まった後に見られた。誤用と混用は3歳近くになるとわずかになった。これらは、2～3歳の間に2言語の使い分けが始まり、次第に正確さを増してゆくことを示している。3歳以降は、文レベルで同一内容を日英語で正しく発話できている例が多数見られた。原因として、表現を未分析のまま個別に習得する項目学習の蓄積があげられる。同一内容を英語で表現できない場合は、状況に合う別の表現の使用、発話の回避、文構成の失敗、日本語の影響が見られた。これは、二児の項目学習への依存による表現の蓄積量の不足によるもので、規則学習の成果に基づいた創造的な発話をする段階に至っていないことが原因であろう。以上の結果は、用法基盤モデルに合致している。

研究成果の概要 (英文)：

Developmental analyses were conducted on utterances produced by two Japanese-English bilingual children raised in an artificial bilingual environment. First, the analyses of the development of English verb usage revealed the following findings. The children started to use verbs by reproducing parental input. They proceeded to replace a word in unanalyzed chunks. They began to be creative by replacing the subject, object or complement in the slot of pivot schemas. They made very few word-order mistakes presumably because they were not highly creative in their utterances by age 4;0. Second, analyses were conducted on the children's ability to distinguish Japanese and English in their utterances. They started to make distinction after age 2;0 and became productive by age 2;6. Synonymous utterances were used for a few months before they start distinguishing the two languages. Self-correction behavior started after they displayed the ability. Misuse and mixing decreased around age 3;0. After age 3;0, they started to use synonymous sentences in large quantity. This is because they engaged in item-learning and stored unanalyzed chunks. When unable to produce the English equivalent of Japanese utterances, they resorted to such strategies as, using semantically similar alternative expressions or avoidance; or they failed in sentence construction, or produced English sentences revealing the influence of Japanese. This will be due to the shortage of English inventory stored by item-learning. The findings above agree with contentions made in the usage-based model.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	400,000	120,000	520,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：日英バイリンガル 言語習得 英語

1. 研究開始当初の背景

近年、早期英語教育への関心が増大し、研究書と一般書共に多数出版されている。しかし、これらには、日本人の子どもが英語を習得してゆく過程の記述が欠落している。

応募者は、父（応募者）が英語、母が日本語という環境の下で養育している、二児（実子）の英語習得を縦断的に研究し、第一子について継続的に成果を発表してきた。

①発音(Mitarai, 2001a), ②言語切り替え(Mitarai 2001b), ③言語切り替え(御手洗・竹内, 2002), ④be動詞(Mitarai, 2003), ⑤否定(Mitarai, 2004), ⑥自然通訳(Mitarai, 2005), ⑦識字(御手洗, 2006), ⑧動詞 give の発達(御手洗, 2007)

これらの研究を行う際に使用した発話データは、インプット中の表現や自分の発話表現を積み上げて、ごく一部を変化させて漸進してゆくという過程を示していた。これは、近年非常に注目されている、Tomasello(2003)らの用法基盤モデルに合致している。

2. 研究の目的

今回の研究では、これまでの第一子のデータに、第二子のデータを加えて、さらに豊富な言語習得の過程の事実を用意して、2児の、言語習得過程の特徴の記述と分析を、usage-based 理論にもとづいておこなう。英語のインプットが比較的少ない状況での幼児の日々刻々と変化する英語習得の過程を密度の濃いデータにもとづき、縦断的に詳述しようと試みた。

3. 研究の方法

父親が英語(外国語)、母親が日本語(母語)で養育をした「人工的」日英バイリンガル児二名の発話のミニコーパス(発話のフィールドノートと録音の書き起こし)を分析資料とした。第一子(女児, Z)は一歳から、第二

子(男児, H)は出生後すぐにバイリンガル養育をされている。

4. 研究成果

4.1 動詞の発達

3歳までの日英バイリンガル二児の gone を含む英語発話の発達を分析し、(1)~(5)の結果を得た。(1)最初の発話は”Gone.”のみである。使用例と場面との結びつきの認識が、習得の鍵となっていた。(2)その後,”X gone.”という主語を伴った未分析なチャンクの発話を始めた。(3)引き続き, X (is/’s) gone. という、軸語スキーマにおける枠(slot)である X 内の要素を入れ替えて創造的な発話を始めた。これらの発達過程は、用法基盤アプローチに従っていた。(4)意味的な誤りについては、2児は少数の動詞の使用場面や発話意図を誤解して誤用した。(5)文法的な誤りでは、チャンクの利用による名詞や前置詞の重複, be 動詞や前置詞といった語の脱落, などである。SOV という日本語の語順の使用例はなかった。

3歳から4歳までの動詞の発達の分析においては、次の結果を得た。

(1) 1語文・2語文の発話において、目的語や前置詞句を落としてインプット文を使用したり、文末の動詞のみを使用したりした。目的語等を伴っていた2語文は未分析のチャンクであった。

(2) 発話内の語数は漸増していった。その要因として、(a)インプットを反復できる語数の増加, (b)場面と結びついたチャンクの使用, (c)単語の入れ替えや追加, が見られた。(c)については、2;5頃から、名詞を入れ替える発話を始め、「枠(名詞)+軸(動詞)+枠(名詞)」等の型を獲得し始めた。主語の入れ替えは、身近な人物の行動の描写、絵本内の動物を描写、自分が同じ動作を行い描写することへ進行した。目的語は、対象児が頻繁に使う動詞を含む発話で始まり、他の動詞を含む発話へと拡張した。

(3) 意味的な過拡張の誤用が見られたが、基本的な語順の誤りは少なかった。これは、4歳までの発話は創造性が少なく、インプットの模倣再生、及びチャンクによる定型表現の組み合わせによるものであることを示している。

4.2 日英語の切り替え

3歳までの2児の日英語間の切り替え能力の発達過程を分析し、(1)～(6)の結果を得た。

(1) 使い分けは2児とも2歳以降に始め、2歳6ヶ月までには多くおこなうようになったが、その開始年齢は第二子のほうが早く個人差が見られた。(2) 使い分けの開始時の言語発達段階では、第一子が1語文段階で第二子が2語文段階という個人差が見られた。(3) 2児とも、使い分け行動の前に同等表現の使用が数ヶ月続いた。(4) 2児とも、同等表現の使用は使い分け開始後も続いた。(5) 2児とも、使用言語の誤りを自己修正する行動は、使い分けが始まった後に見られた。(6) 2児とも、誤用と混用は3歳近くになるとわずかになった。これらは、個人差はあるものの、2～3歳の間に2言語の使い分けが始まり、次第に正確さを増してゆくことを示している

3歳から4歳までの二児の日英語間の切り替え能力を分析して、(1)～(5)の結果を得た。(1) 日英語の混用は単語単位で起こった。原因として、語彙不足やtopic-comment構造の影響、対話者への意識や発言の強調が考えられる。(2) 同一内容を日英語で正しく発話できている例が多数見られた。原因として、表現を未分析なまま個別に習得する項目学習の蓄積をあげた。(3) 同一内容を英語で表現できない場合は、状況に合う別の表現の使用、発話の回避、文構成の失敗、日本語の影響が見られた。原因として、表現語彙の不足、項目学習による蓄積量の不足をあげた。(4) 統語的な誤りでは日本語のtopic-comment構造の影響が少数見られた。未分析な表現では対応できない複雑な内容の場合には、日本語の影響が出た。(5) 意味的な誤りにおける日本語の影響も少数見られた。

以上の成果により、バイリンガル児の英語習得における、言語習得の漸進性を確認できた。これは、幼児の第二言語習得に対する過大な期待（特に習得の速度）に注意を促すこと、及び、幼児の言語習得においても、パターンの定着と入れ替えを多用しており、これは学校現場で使われているパターン練習に通じるものであるという、言語習得の基本的な原理を提供することが

できた。

さらに、日英語の切り替えによる区別は早期から始まることを確認できた。これは、幼児バイリンガリズムにおける「言語の混乱」といった俗説に対する有力な反証となった。幼児の通訳能力の発達という肯定的面と、母語の第二言語への干渉の強さという否定的面を縦断的に記述できた。これは、早期バイリンガルをおこなえばネイティブ並みになるという過信に対して、警鐘を鳴らす意義がある。すなわち、優勢な言語の劣性な言語への影響は発達の不可避であり、そのことをふまえた上で、母語の干渉に注意しながら第二言語教育を行ってゆくという指針の提供ができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①御手洗靖、二人の日英バイリンガル幼児の3～4歳における英語発話能力—二言語による発話の誤りの分析を中心に—、九州英語教育学会紀要、査読有、38巻、2010年 39-48

②御手洗靖、二人の日本人幼児における日英語使い分け能力の発達、九州英語教育学会紀要、査読有、37巻、2009年 53-60

[学会発表] (計6件)

①御手洗靖 日本人幼児における英語疑問文の発達、九州英語教育学会鹿児島研究大会、2010年12月12日、鹿児島大学

②御手洗靖 二人の日本人幼児における英語疑問文の発達、全国英語教育学会、2010年8月8日、関西大学

③御手洗靖 二人の日本人幼児の日英語使い分け能力の発達(2)、九州英語教育学会沖縄研究大会、2009年11月22日、沖縄国際大学

④御手洗靖 二人の日本人幼児における英語の動詞の習得過程、全国英語教育学会鳥取研究大会、2009年8月8日、鳥取大学

⑤御手洗靖 二人の日本人幼児の日英語使い分け能力の発達、九州英語教育学会、2008年11月23日、九州産業大学

⑥御手洗靖 日本人幼児による英語の動詞の習得—習得開始から3歳までの縦断的分析—、全国英語教育学会東京研究大会、2008年8月9日、昭和女子大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

御手洗 靖 (MITARAI YASUSHI)
大分大学・教育福祉科学部・准教授
研究者番号：80229731